サツマシジミの飼育法

作成：2005.9.05　仲西周二

全般

５月に発生した本種は、この時期に豊富に存在するサンゴジュ他の各種の花を利用することが知られているが、その他の時期には一体何を主に利用しているのであろうか。秋遅くにモチノキの花芽が膨らむのを待って産卵させ、寒冷期を通じて飼育し、２月頃に美しい低温期型を羽化させる事が出来る。ヤクシマルリシジミの飼育と並んで、厳冬期に楽しめる飼育の代表である。

採卵

まだ小さいがモチノキの花芽に産卵させる。透明な容器の中に花芽を付けだ枝と一緒に母蝶を入れ明るい室内に置けば、採卵は容易である。但しモチノキは東京地区では２～３月頃に開花のピークを迎えるので、１１月頃に使える花芽を着けた株は希少である。それだけに予め探しておくことが重要である。

幼虫の飼育

初齢幼虫の飼育には私はヤツデの花を愛用している。ゴマ粒ほどのモチノキの花より幼虫も喜んで食べる。実はヤツデには幼虫が食べるものとそうでないものがあり、外見にほとんど差が無く見分けが難しいとは関西の虫屋の定見である。ダメな方を与えると幼虫は結局死んでしまうそうだ。止む無く数本の株から採取した花を始めに与えて、問題ない株からそれ以後の花を採集している。まだダメな株に当たったことが無いと思っているが、幼虫が目減りするのはこのせいかもしれない。幼虫が識別できる程度に大きくなるまではシャーレ中で新鮮な餌の継ぎ足し補給で飼育し、幼虫が識別できればプラ容器内の瓶挿し飼育に変えた。容器の蓋は一部をカットしてメッシュ張りとした。

ヤツデの花のピークが過ぎる頃、代わってビワの花芽が膨らんでくる。霜が降りるとヤツデの花は傷んでしまうこともあり、食餌をビワの花芽に切り替えている。手近でモチノキの開花した花房が入手できればそれでも良い。ビワの花芽は一つの花房が大きく、瓶挿しすればもちも良いので幼虫の生育は遅いが飼育は非常に楽である。飼育例では２月始めに蛹化し、羽化は２月末であった。

ビワの花を食べる終齢幼虫

ビワの花房上で蛹化

モチノキ上の蛹